日本語文法事典

大修館書店

日本語文法学会 編

仁田義雄

尾上圭介

影山太郎

鈴木泰

村木新次郎

杉本武

編集

日本語文法事典

日本語文法学会 編

仁田義雄

尾上圭介

影山太郎

鈴木泰

村木新次郎

杉本武

編集

大修館書店

にほんごぶんぽうじてん
日本語文法事典

©日本語文法学会，2014　　NDC810／viii, 749p／22cm

初版第1刷――2014年7月10日

編者――日本語文法学会（にほんごぶんぽうがっかい）
発行者――鈴木一行
発行所――株式会社 大修館書店
〒113-8541 東京都文京区湯島2-1-1
電話03-3868-2651（販売部）　03-3868-2294（編集部）
振替 00190-7-40504
［出版情報］ http://www.taishukan.co.jp

装丁者――田中　晋
印刷所――壮光舎印刷
製本所――牧製本

ISBN978-4-469-01286-6　Printed in Japan

Ⓡ本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用であっても著作権法上認められておりません。

まえがき

戦後，日本語文法研究は，いわゆる伝統的な研究を一つの重要な源泉とし，それを踏まえ深化させようとするとともに，欧米の新しいあるいは伝統的な言語理論に基づく研究も加わり，それらに刺激された分析・記述成果も現れだした。さらに，日本語教育や自然言語処理などの分野でもそれぞれのニーズに応じた独自の研究成果が発表されるようになり，従来取り上げられなかった問題にも光が当たるようになって，日本語の文法現象そのものが格段にきめ細かく明示的に分析・記述されるようになってきた。この間，日本語文法研究の幅が大きく広がり，研究手法にも大きな進展・多様化が見られた。

こうした状況を受け，2000年12月に日本語を核に据えながらも，他の言語の研究者との対話を図り，他領域の研究者とも協同して日本語文法研究の進展を目指す集まりである日本語文法学会が設立された。

これを機に，多様化し深化してきた研究成果をできるだけ広い範囲の研究者や未来の研究者との間で共有することによって，今後の日本語文法研究を進展させるための一つの重要な情報源，出発の書として，この『日本語文法事典』を編むことにした。この時点において，日本語文法研究の世界でこれまで明らかになったことをまとめ，整理しておくことは大きな意義のあることだと考えた。

本事典は，2002年に最初の編集会議を開き，2014年春ようやく刊行に至った。編集・執筆にあたっては，日本語文法学会が総力を挙げて取り組むとともに，学会外からも積極的に適任者の協力を得た。

本事典には，「文法」という項目がない。あえて項目化しなかった。本事典の内容総てでそれに答えている，という思いがある。執筆・編集に時間がかかったわりには，項目に漏れがないわけではない。もう少し時間と人があれば，さらに項目を充実させられた，という思いが残らないではない。

以下，本事典の特色を少しばかり記しておく。

1）本事典は，学史上の研究成果も含むが，主に20世紀後半の日本語文法研究の成果の総まとめ，棚卸を目指した。2）一つの文法現象をめぐっても，観点の取り方・焦点の当て方によって見えてくる様相の異なってくることが少なくない。他の領域でも同様のことがあろうと思われるが，特に文法研究においては，同一の文法現象についてもさほど説明能力の変わらない複数の分析・記述がありうる。さらに，見えてくる様相の異なりは，そもそも何を記すことが当該項目の解説になるのか，という見解の異なりをも招来するだろう。本事典では，同一項目に対して複数の人間が並行して独立に執筆に当たる，という方法を積極的に取り入れた。複数者執筆項目は，実に全項目の12パーセント近い。さらに3人で書いた項目も20近く

ある。同一の項目を複数の人間が執筆するという事典は，本事典が最初ではないだろうか。このことによって，21 世紀初頭の日本語文法研究の世界でどのような考え方が存在・併存していたかを示すことができたし，読者は重要な現象，概念をめぐっての多様な考え方の存在を知ることができる。これが本事典の最大の特徴である，と考えている。3）上述のことと関わるが，本事典は，単に調べるだけでなく，読むこと・読み進めることに耐えうる事典になっている。4）また，参照項目を積極的に付すことで，当該項目の総論に当たる体系や枠組み，当該項目の各論に当たる現象の説明，当該項目と関連する文法現象などを総合的に知り把握することが可能になっている。5）日本語文法研究の独自の成果・世界を示すとともに，日本語文法に対する考察，分析・記述が一般言語学や他の個別言語学とも対話可能なものになっていくよう心掛けた。

日本語文法研究のこれまでの成果をまとめ，最先端を分かりやすく紹介・解説する一方，学説間の異同やその問題点を指摘した本事典を，今後永くこの分野の羅針盤・手引きの役目を果たしうる書として世に送りたい。

2014 年 5 月

日本語文法事典編集委員会
仁田　義雄（編集主幹）
尾上　圭介
影山　太郎
鈴木　　泰
村木新次郎
杉本　　武

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

編集委員・執筆者一覧

●編集委員

［編集主幹］

仁田義雄　尾上圭介　影山太郎　鈴木 泰　村木新次郎　杉本 武

●執筆者（50 音順）

青木三郎
青木博史
青山文啓
安達太郎
阿部 忍
天野みどり
池上嘉彦
石井久雄
石居康男
石川康恵
井島正博
伊藤雅光
井上 優
今井邦彦
内田賢徳
大木一夫
大鹿薫久
大島資生
大西拓一郎
大場美穂子
大堀壽夫
沖 裕子
尾上圭介
影山太郎
加藤久雄
加藤泰彦
金子尚一
金田章宏
辛島美絵
川端善明
川村 大
菊地康人
北原博雄
喜屋武政勝
金水 敏
久島 茂
工藤 浩
工藤真由美
久保 進
窪薗晴夫
郡司隆男
小林賢次
小柳智一
小矢野哲夫
近藤要司
齋 美智子
斎藤倫明
佐久間まゆみ
定延利之
佐藤里美
ザトラウスキー，ポリー
澤田美恵子
山東 功
渋谷勝己
白川博之
城田 俊
杉本 武
鈴木重幸
鈴木 泰
鈴木丹士郎
鈴木 浩
鈴木康之
須田淳一
須田義治
砂川有里子
高瀬匡雄
高梨信乃
高見健一
高山道代
高山善行
田窪行則
竹沢幸一
龍城正明
田野村忠温
丹保健一
角田太作
坪井美樹
常盤智子
友定賢治
長嶋善郎
中畠孝幸
中村 捷
ナロック，ハイコ
西田隆政
西田直敏
仁科 明
西村義樹
西山佑司
仁田義雄
丹羽哲也
沼田善子
野田春美
野田尚史
野村剛史
野村眞木夫
浜田麻里
早津恵美子
半藤英明
日高水穂
フィアラ，カレル
藤井俊博
藤田保幸
船城道雄
堀江 薫
堀川智也

前田直子
益岡隆志
松木正恵
松本泰丈
松本裕治
松本 曜
峰岸 明
三原健一
三宅知宏
宮崎和人
村木新次郎
村田美穂子
茂木俊伸
森山 新
森山卓郎
八亀裕美
矢澤真人
保川亜矢子
屋名池 誠
山岡政紀
山口堯二
山口佳紀
山田 進
山田敏弘
山田昌裕
山梨正明
吉田茂晃
鷲尾龍一

凡例

1．**構成・配列**　日本語文法研究に関わる事項を中心に，人名・書名なども含む514項目を取り上げ，項目名による五十音順に配列した。

2．**執筆者名の表示**　各項目の執筆者名はその項目の末尾に表示した。さらに，巻頭に「編集委員・執筆者一覧」を設け，そこに執筆者全員をまとめて記した。

3．**術語の表記**　できるだけ各分野で一般的に通用している表記に従って統一を図るよう努めた。ただし，「パラメータ」と「パラミター」のように，もとは同じ英語に発する語でありながら分野によって慣用表記が異なるケースもあり，その場合には項目の内容に応じておのおのの分野の慣用表記に従った。

4．**外国語の表示**　外国語起源の用語については，必要に応じて原語を添えた。

5．**記号の説明**

　＊…非文（文法的に適格でない文）であることを表す。

　？…その適格性に疑問がある文であることを表す。

　｛　／　｝…/を境に置き換え可能な表現であることを表す。

6．**表記・仮名遣い**　一般的な表記・仮名遣いについては各執筆者の意向を尊重することとし，本事典全体にわたる統一はあえて図らなかった。

7．**参照項目**　ある項目で言及した内容と関連した説明が別の項目にある場合には，➧で参照項目を指示した。

8．**参考文献**　各項目で取り上げられた内容についてさらに詳しく知りたい読者のために，項目の末尾に参考文献を挙げた。

9．**索引**　事項，語句，人名（見出しに取り上げたもののみ），書名を分けずに，すべてを一本化した索引にした。配列は，まず日本語の用語を五十音順に並べ，そのあとにアルファベットが語頭に来る用語をABC順に並べた。

目次

まえがき――iii
編集委員・執筆者一覧――v
凡例――viii

●
本文――3

●
日英用語対照表――695
英日用語対照表――699
索引――703

日本語文法事典

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

あ行

■ IC 分析

IC は immediate constituent（直接構成素）の頭文字であり，IC 分析は，文などを，それを直接に構成する要素に分解する分析である。アメリカ構造主義言語学の時代に，形態論，統語論の一部として開発され，その後の生成文法においても，句構造を定義する基本的な分析法となっている。

例えば，「あの赤い家が雪に覆われている」という文は，文頭の名詞句と後半の動詞句の 2 つの要素に分解できる。文頭の名詞句が 1 つの構成単位であることは，「あの赤い家」が 1 つの名詞，例えば「校舎」で置きかえられることから確認できる。同様に「雪に覆われている」は「見える」のような 1 つの動詞で置きかえられるので，1 つの構成単位である。

それぞれの構成素はさらにそれを直接構成する要素に分解できる。例えば，「雪に覆われている」には，動詞とそれを修飾するものが含まれる。このように，IC 分析は，文の最小単位に至るまで，繰り返しおこなうことができる。

➜句構造，構造言語学

参考文献

Bloomfield, Leonard (1933) *Language*. Holt, Rinehart and Winston, Inc.〔Reprint：The University of Chicago Press, 1984, p. 161〕〔三宅鴻・日野資純訳（1962）『言語』大修館書店〕

［郡司隆男］

■曖昧性

ある語連続（句・文など）が概念的に異なる複数の意味を持つとき，その語連続を曖昧であるといい，そうした性質を曖昧性（ambiguity）という（「多義性」ないし「両義性」ということもある）。例えば，「世界のネコ展」は「世界｜の｜ネコ｜展」という同じ語の連続だが，〈「世界のネコ」の展覧会〉と〈世界の「ネコの展覧会」〉という別々の意味を持つ。この意味の違いは，単位のまとまり方の違い，すなわち［世界のネコ］［展］と［世界の］［ネコ展］という統語構造の違いから生じる。「男が好きな女」も〈男が好む女〉と〈男を好む女〉の 2 通りに曖昧である。この句はどちらの意味でも，［男が好む］［女］という同じ構造だが，実際の「表面の構造」ではなく，論理的な意味関係を表す「基底構造」のレベルで構造が違うと考えれば，これも構造的な違いにもとづく曖昧性とすることができる。

一方，複数の意味的に関連する語義を持つ多義語，あるいはたまたま音形が同じである同音異義語を含む語連続が複数の意味を持つことがある。例えば，「写真をとられた」は「とる」の多義性によって〈撮影された〉と〈盗まれた〉という 2 つの意味を持つ。「たこに興味がある」は，「たこ」が〈空のタコ〉〈海のタコ〉〈皮膚のタコ〉という 3 つの別語（同音異義語）であることで，3 通りに曖昧になる。この場合の曖昧性は，「語彙的曖昧性（lexical ambiguity）」ということがあり，これに対して構造にもとづく曖昧性を「構造的曖昧性（structural ambiguity）」ないし「文法的曖昧性（grammatical ambiguity）」ということがある。

「（転んで）足を折った」は場面や文脈に応じて〈右足を折った〉〈左足を折った〉〈両足を折った〉の 3 通りに解釈可能である。これは，

「足」の意味がそもそも左右や数に関して「指定されていない」ことから生じるもので，「足」の内在的な意味の違いによるのではない。この種の違いを，曖昧性と区別して「漠然性(vagueness)」と呼ぶ。なお，漠然性の意味で曖昧性を使う立場もあるので注意を要する。

■参考文献

Ullmann, Stephen (1962) *Semantics: An Introduction to the Science of Meaning.* Basil Blackwell.〔池上嘉彦訳 (1969)『言語と意味』大修館書店〕

Kempson, Ruth M. (1977) *Semantic Theory.* Cambridge University Press.

［山田 進］

■アクセント

●**アクセントとは**——①単語に指定された高低や強弱の型，②単語の中での際立ち（プロミネンス），または際立っている部分を指す。日本語の研究では①の意味で用いられることが多く，東京方言ではたとえば「雨」は高低，「飴」は低高のアクセントを持つと言う。②の意味は日本語研究でしばしば使われる「アクセント核」とほぼ同義であり，たとえば「あざらし」は「ざ」にアクセント(核）がある，「アメリカ」のように平坦なピッチ（平板式）の語にはアクセント(核）がないと言われる。

●**アクセントの種類**——単語に指定されている音声特徴によって，高低アクセント（＝高さアクセント，ピッチアクセント），強弱アクセント（＝強さアクセント，ストレスアクセント）などに分類される。日本語は高低アクセント，英語は強弱アクセントの代表とされる。

●**アクセントの機能**——高低や強弱という音声特徴の違いを超えて，アクセントには弁別機能と頂点表示機能，境界表示機能がある。弁別機能とは上記の「雨-飴」のように単語を区別する働きである。頂点表示機能は単語の一部分を際立たせることによって語のまとまりをつけようとする機能，境界表示機能は境界付近を際立たせることによって，語の始点あるいは終点を示す働きである。

●**アクセント体系**——その言語（方言）にいくつのアクセント型があるかによって，「無型アクセント」「一型（いっけい）アクセント」「二型（にけい）アクセント」「多型アクセント」などに分類できる。無型アクセントとはいずれの語に対してもアクセント（高低や強弱）の指定がない体系，一型アクセント，二型アクセントとは語の長さにかかわらず，それぞれ一つ，二つの型が存在する体系，多型アクセントとは語が長くなるにつれて型が増えていく体系である。

➔プロミネンス，プロソディー

■参考文献

徳川宗賢編 (1980)『〈論集日本語研究 2〉アクセント』有精堂出版.

窪薗晴夫(2006)『アクセントの法則』岩波書店.

［窪薗晴夫］

■アクチオンスアルト（動作態）

●**アクチオンスアルトとは**——Aktionsart (独)，英語で言えば，‘manners of action’という意味。密接に関わりあうものの，アクチオンスアルトの規定には，①動詞の語彙的な意味の中に存在する時間的な性格を指す場合（これには時間的な性格の捉え方により広狭種々のものがある）と，②単語を派生するという手続きでもって表される，動詞の表す動きの内的時間構成の表し分けを指す場合とがある。日本語の文法研究では，アクチオンスアルトと言えば，主に②のタイプであり，複合動詞化という手段で表されることが基本で，局面動詞と呼ばれることもある。

●**アクチオンスアルトの表現形式**── 基本的な形式には，「(シ)カケル」「(シ)ハジメル/(シ)ダス」「(シ)ツヅケル」「(シ)オワル」がある。「(シ)ヨウトスル」「(シ)オエル」などが加えられることもある。「(シ)キル」「(シ)アゲル」「(シ)ツクス」のような複合動詞をも表現形式に加える研究者もいるが，これらは，出現上の制約が大きく，未だ文法形式化していない。

●**アクチオンスアルトと（中核）アスペクトとの関係**── アスペクトの中核は，「スル―シテイル」によって表し分けられる完結相（完成相）と未完結相（持続相，継続相とも）の対立である。アクチオンスアルトのそれぞれは，「彼は手紙を書きはじめる―彼は手紙を書きはじめている」のように，完結相か未完結相かの，（中核）アスペクトのいずれかを帯びてしか実現されない。その意味でアクチオンスアルトは二次的である。

●**アクチオンスアルトの下位種**── 日本語のアクチオンスアルトの下位種としては，将然相（起動相とも言う），始動相，継続相，終結相などが取り出されている。

《将然相》将然相とは，基本的に「(シ)カケル」で表されるもの。将然相は，動きに本格的に取りかかるまでの段階を表す。(1)「僕は階段から落ちかけた。」のように，時間幅のない動きの場合，動きのない状態から動きに取りかかるまでの段階しか表せない。それに対して，(2)「成績が少し落ちかけたが，頑張って直ぐ元に戻した。」のように，時間幅のある動きの場合，(1)の意味だけではなく，動き始めから本格的な動きに至るまでの取りかかり段階を表しうる。

動詞が動きを表せば，「僕はもう少しで謎の大陸を発見しかけたんだがなあ。」のように，基本的に将然相を作りうる。

《始動相》始動相とは，「(シ)ハジメル/(シ)ダス」で表されるもの。「汗でシャツが濡れはじめた。」「子供が暴れだした。」のように，始まりの段階の動きを行うことを表す。

「*死にはじめた」「*発見しだした」「*座りはじめた」が逸脱性を有していることから分かるように，始動相を持つ動きは，動きそのものが時間幅を有するもの。もっとも「子供が飢えで次々と死にはじめた。」のように複数事象を表す場合は別。

《継続相》継続相とは，「(シ)ツヅケル」で表されるもので，動きや事態を継続することを表している。(1)「男は一生懸命走りつづけた。」，(2)「川の水が増えつづけた。」，(3)「彼は倒産しそうな銀行にお金を預けつづけた。」，(4)「彼は硬い椅子に座りつづけた。」などがこれ。(1)(2)のように，動きの展開過程そのものの維持を表す場合と，(3)(4)のように，動き後の状況を維持する場合がある（この場合，動き後の状況の維持が新たな動きとして捉えられているとも言える）。

「*死につづけた」「*発見しつづけた」の逸脱性から分かるように，継続相を持つものは，動きそのものだけでなく，動き後の状況維持が取り出せ，それに時間幅があるもの。時間幅が存することによって，「男は部屋に居つづけた。」のように，状態に対しても接続可能。

《終結相》終結相とは，「(シ)オワル」で表されるもの。完成・終了段階の動きを行うことを表す。「彼は手紙を書きおわった。」「僕はやっとプラモデルを組み立ておわった。」などがこれ。

「*動きおわった」「*太りおわった」の逸脱性から分かるように，終結相になる動きは，動きの始点と終点が分離でき，終点が予め定まっているものである。

➜アスペクト，動詞，動作動詞と変化動詞

■ **参考文献**

Comrie, Bernard (1976) *Aspect*. Cambridge University Press.〔山田小枝訳（1988）『アスペクト』むぎ書房〕

金水 敏（2000）「時の表現」仁田義雄・益岡隆志編『日本語の文法２』岩波書店.
高橋太郎（2003）『動詞九章』ひつじ書房.
須田義治（2010）『現代日本語のアスペクト論』ひつじ書房.

［仁田義雄］

■アスペクチュアリティ

●**アスペクチュアリティとは**——形態論的なカテゴリーのムードに対してモダリティがたてられたように，それと並行して，形態論的なカテゴリーのアスペクトに対してたてられたものがアスペクチュアリティである。モダリティやアスペクチュアリティは，形態論的なカテゴリーに対して，構文論的なカテゴリー，あるいは，機能・意味的なカテゴリー（機能・意味的な場）と呼ばれる。アスペクチュアリティは，その提唱者であるロシアのアスペクト論者，ボンダルコ（A. B. Бондарко）によれば，動作の時間的な展開の性格の表現に関わる，相互に作用しあう言語的な（形態論的，構文論的，語構成的，語彙的な）諸手段を，その内容の側面が統一する，二側面的な統一体であると規定される。日本語の研究においては，アスペクチュアリティという用語は，意味論的なカテゴリーをさして，すなわち，単に文のアスペクト的な意味の側面をさして用いられることもあるが，上のような意味において用いている例としては，奥田（1988）や工藤（1995）などがあげられる。

ムードとモダリティを区別する理由として，しばしば強調して指摘されるのは，ムードとモダリティがくいちがうことがあるということである。すなわち，形態論的には命令形に対立する叙述形（たとえば「すわれ」に対する「すわる」）でありながら，文においては命令の意味を表すことがある（「そこにすわる！」）といったことである。この事実は，文のレベルの意味が，単語の形態論的な形という表現手段だけでなく，さまざまな表現手段の作用を受けて，実現していることを述べたものと言える。文法論の中でモダリティやアスペクチュアリティをたてる必要性は，形態論的な意味とその表現手段にとどまらない，文のレベルにおいて実現するさまざまな意味と，その複雑な表現手段との体系の検討に，研究を向かわせることにある。

●**その表現手段と表現内容**——日本語のアスペクトにおいては，完成相と継続相という形態論的な形が，スル（シタ）とシテイル（シテイタ）という規則的な表現手段によって，ひとまとまり性と継続性という，対立的で一般的な，形態論的な意味を表している。それに対して，アスペクチュアリティにおいては，その表現手段は，さまざまな階層に属す言語的な手段の複合であり，また，その表現するアスペクト的な意味（表現内容）は，対立的（相互排除的）でなく，相互補足的な多様な「場」をなしている。

アスペクチュアリティの表現手段は，形態論的な形だけでなく，アスペクト的な意味を表すさまざまな形（シテアル，シテオク，シテシマウ，シツツアルなど），いわゆる局面動詞（シハジメル，シツヅケル，シオワル），語彙・文法的な系列（語彙＝文法的な種類）とも呼ばれる，カテゴリカルな語彙的な意味に基づく動詞の種類（動作動詞，変化動詞，状態動詞など），アクチオンスアルトとも呼ばれる複合動詞（シツクス，シキルなど），副詞（「すぐに」「ときどき」など）など，さまざまである。文のレベルにおいては，一つのアスペクト的な意味を表すのにも，複合的な手段が使われているし，異なる表現手段によって同じアスペクト的な意味が表されることもある。

アスペクチュアリティの表現内容としては，限界性，過程性，局面性，持続性，回数性（反

復性）などをあげることができる。それらは，動作の時間的な展開の仕方（動作の内的な時間構造）という，アスペクチュアリティの一般的な意味にまとめあげられる。

形態論的なカテゴリーは「形式から意味へ」と研究が進むが，構文論的なカテゴリーは「意味から形式へ」と研究が進む。アスペクチュアリティの中のさまざまな意味領域をまとめあげているのは，表現手段ではなく，それらの表す意味である。そのため，アスペクトのない言語はあるが，アスペクチュアリティのない言語はないとも言われる。

◆アクチオンスアルト（動作態），アスペクト

参考文献

奥田靖雄（1988）「時間の表現(1)(2)」『教育国語』94，95.

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト』ひつじ書房.

須田義治（2010）『現代日本語のアスペクト論』ひつじ書房.

Бондарко, Александр Владимирович (1999) *Основы функциональной грамматики*. Санкт-Петербург.［Bondarko, Aleksandr Vladimirovich (1999) *Osnovy funktsional-noi grammatiki*. Sankt-Peterburg.］〔ボンダルコ，A. V.（1999）『機能文法の基礎』サンクト・ペテルブルク〕

［須田義治］

■アスペクト[1]

1. アスペクトとは

どのような言語でも，コミュニケーション活動においては，時間的にみて，出来事が「いつ，どのように」起こる（起こった）のかを伝えなければならない。「昨日，さっき，昔/今，今日/明日，将来，やがて」「しばらく，ずっと/だんだん/毎日，時々，たまに」のような時間副詞，時間名詞は，どのような言語にもあって，出来事が「いつ，どのように」成立するかを表す。日本語ではこのような語彙的な表現手段のほかに，述語が文法的に形を変えることによって，出来事の時間を表し分ける。これがアスペクトとテンスであり，2つの文法的カテゴリーはともに時間を捉えている点で共通している。

このうちアスペクトは，動的な時間的展開を表す「運動動詞」において成立する文法的カテゴリーであり，「運動の時間的展開の捉えかたの違い」を表し分ける。アスペクトという用語は広義にも狭義にも使用されるが，文法化の最も進んだ形態論的対立を形成する場合が，狭義のアスペクトである。

アスペクト研究は，海外でも国内でも盛んな領域であり，次のような進展が見られることから，今後日本語のアスペクト研究も新たな段階に進んでいく必要がある。方言まで含めて考えると日本語のアスペクトは多様である。

① マイノリティー言語を含む世界の諸言語を見渡した言語類型論的研究
② 標準語研究と方言研究の総合化
③ 文法化という観点からの共時的研究と通時的・歴史的研究の総合化
④ ピジン，クレオール研究を含む言語接触論的観点からの総合化

2. 標準語のアスペクト体系

標準語の文法的（形態論的）アスペクトは，シテイル（シテイタ）形式とスル（シタ）形式の対立としてある。テンスとの相関性のもとに，表1のような，終止におけるパラダイムが形成されている（スル形式がアスペクト対立を形成しないとする立場もある）。

シテイルは，動作継続を表す場合と結果継続を表す場合があるが，どちらも継続的に運動を捉える点では共通する。一方，スルは，非継続

表1　テンスとの相関における標準語のアスペクト

テンス＼アスペクト	完成	継続
非過去	スル	シテイル
過去	シタ	シテイタ

的に，つまりは，運動をひとまとまりとして完成的に捉える。従って，完成相では，他の出来事との関係は「継起」になり，継続相では「同時」になる。下記は，テンス的に過去の場合であるが，シテイタ形式では，他の出来事（駅に着いた）との時間関係は同時であり，シタ形式では継起である。

(1) 9時に駅に着いた。すると電車が来た。
〈完成・過去〉

(2) 9時に駅に着いた。すると電車が来ていた。　〈(結果) 継続・過去〉

非過去形のシテイル形式は，テンス的に現在を表すが，スル形式は未来になる。これは，完成というアスペクト的意味と，発話時と同時であるという現在の意味とが矛盾するからである。(なお，一般言語学では，perfective という用語と，perfect という用語が区別されている。上記の「完成」の規定は，基本的に，perfective に対応するものである。)

3. 動詞分類とアスペクト

アスペクトは動詞に最も近い文法的カテゴリーであることから，動詞の語彙的意味のタイプとの相関性がある。標準語では，表2のような動詞分類ができる。

運動動詞と非運動動詞は連続的であり，中間には「思う，心配する」のような心理的状態や「匂う，見える」のような知覚，「疲れる」のような生理的状態を表す動詞がある。

また「存在する / 存在している」のようにスル形式・シテイル形式の双方があっても，アスペクト的対立を形成しない場合もある。

表2　アスペクトの違いに基づく動詞分類

【1】運動動詞：シテイルとスルのアスペクト対立がある動詞
【1.1】主体動作動詞：スル（完成）とシテイル（動作継続）の対立となる動詞 ［開ける，壊す，見る，飲む，歩く］
【1.2】主体変化動詞：スル（完成）とシテイル（結果継続）の対立となる動詞 ［開く，壊れる，枯れる，来る，座る］
【2】非運動動詞：シテイルとスルのアスペクト対立がない動詞
【2.1】シテイル形式がない動詞 ［ある，いる］
【2.2】スル形式がない動詞 ［優れている，似ている，そびえている］

標準語では，運動動詞は，シテイル形式が「動作継続」を表すか「結果継続」を表すかによって，主体動作動詞と主体変化動詞に下位分類される。ただし，日本語諸方言を含めて総合的にアスペクトを考える場合には，運動動詞の3分類が有効な場合がある（表3）。

表3　運動動詞の3分類

【1.1】主体動作動詞：見る，叩く，飲む，読む，食べる，走る，歩く，揺れる
【1.2】主体動作客体変化動詞：開ける，壊す，殺す，入れる，飾る，建てる，作る
【1.3】主体変化動詞：開く，壊れる，切れる，死ぬ，入る，建つ，来る，座る，倒れる

このうち，主体動作動詞は，必然的終了限界のないアテリック（atelic）な動詞であり，主体動作客体変化動詞と主体変化動詞は，必然的終了限界のある（telic）な動詞である。標準語における運動動詞2分類であれ，諸方言を含めた運動動詞3分類であれ，アテリックかテリックかという動詞2分類とは異なることに注意しておく必要がある。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com